

フィンランドの大学受験と教育政策

松本美希

今回は大学選択・大学受験にまつわる話です。フィンランド人の友人と話していて気付いたフィンランドと日本の教育の相違点について書きたいと思います。

1. 大学のレベル・序列をさほど意識していない

どのように大学を選んだのか、という問いに対しては、興味があることが勉強できるから、という答えが圧倒的に多かったです。ヘルシンキ大学は世界大学ランキングではベスト 100 位内にも関わらず、「レベルが高いから」などというコメントが見られなかったのが意外でした。よく日本で言及される「偏差値」という概念はないようで、大学選びの指標は「自分のやりたいことが勉強できるか」というものが主(あとは立地など)であるようです。



人気の海沿いのカフェ

2. 受験勉強はその分野の勉強が中心

大学入学のための試験は、高校生全員に共通のものと、志願先の大学が課すものと、主に二種類あるそうです。共通試験と大学独自の試験が二種類あるという点においては、センター試験と大学による試験との二種類がある日本と非常に似ているように感じました。

では、それぞれへの対策はいかなるものなのでしょうか。

まず、共通試験に関しては、学校の勉強をしっかりとやることで十分な対策ができるそうです。大学独自の試験に関しては、入試にあたって読んでおくべき本が指定され、試験はその本の範囲から出題される、と聞きました。そのため受験生はその指定の本をみっちり隈なく勉強するそうです。どちらの試験も、基本的に独学で済ませるそうで、塾はほとんど無いとのこと。また、大学独自の試験は、大学はもちろん学部・コースごとに異なるので、その分野をどれほどしっかり勉強したかが問われる試験であり、学力による序列、という考え方はあまりないそうです。



午前0時頃の図書館の様子（午前1時まで開いています）

分野ごとに、何を学んだか、という考え方は大学に入った後、特に就職の際にも強く現れています。フィンランドの就職は、理系の学生はもちろん、文系の学生も、大学で学んだことを活かせるような職につこうとする、というのが一般的です。文系の学生も多くが修士課

程まで進みます。いい大学に入ることが良い職を得ることにつながる、という考え方はあまりなく、そこで何を学んだか、ということが就職の際には問われるそうです。

ちなみに良い職、に対する基準に関しては日本とさほど違いがないように感じました（例えば高給である、やりがいがある、大きな会社である、など）。ただ感覚として、上記のように専門性を活かしたいと考える学生が多い、日本では多くの方が気にする福利厚生を気にしない（整っているのが当たり前であるため）、という違いはあるように思います。また会社の知名度による世間体を気にする、という風潮は日本と比べて弱いように感じました。

非常に大雑把にですがまとめてしまうと、フィンランドは、「それぞれが好きなことをのびのびやってくれたらいい！」という考え方が浸透しているように思います。



ラップランドのトナカイ



クリスマス仕様にライトアップされるヘルシンキ中心地

これは国家戦略にも関係しているように感じています。フィンランドは国家戦略として、ボトムアップによるイノベーションを重視しています。国が何でもかんでも主導するのではなく、個人個人が専門性を活かし起業家精神を発揮させ活動していくことが奨励されています。私の専攻は社会心理学なのですが、ヘルシンキ大学の社会心理学の教授の中には起業家精神（entrepreneurship）をテーマとして研究されている先生がいらっしゃり、対象はアントレプレナーシップと聞いて想像しやすいスタートアップだけではなく、農業や社会科学の領域にもわたります。

このように国家戦略と大学受験にまつわる話を結びつけて話してしまうのはやや強引か

もしもかもしれませんが、個人的につながりがあるように感じたので書かせて頂きました。日本の場合はどのようなつながりがあるのか、ということも今後考えてみたいと思います。